# 1941 年の撮影と判明した竹島でのアシカ猟師の集合写真

井上 貴央
（鳥取大学名誉教授）

はじめに
1　「集合写真」をめぐる年代
2　「集合写真」の風景と人物
3　橋岡家にあった「集合写真」
4　吉岡大蔵氏の竹島取材
5　「集合写真」の撮影年代の検討
6　吉山武氏証言の検証
7　1941 年撮影と確認できた写真
おわりに

## はじめに

江戸時代以来、日本海の竹島において日本人がアシカ猟に従事してきたのは厳然たる事実である。明治時代に入ると、島根県は竹島のアシカ猟業を許可漁業として猟が行われてきたが、1941 年の太平洋戦争の勃発によってアシカ猟は中止するのやむなきに至った。この間のアシカ猟をはじめとする竹島の映像資料は残っているものが少ないが、竹島における漁猟活動やニホンアシカの生態を示す貴重な資料である。

なかでも、「韓国人海女が写るアシカ猟師の集合写真」（以下、「集合写真」と略す）は、これまでも書籍・新聞・パンフレットなどに収載され、隠岐の島町の久見（くみ）竹島歴史館でも展示されている有名な写真である（図 1）。しかし、いつ、誰が、どのような状況で撮影したかについては不明であった。

2021 年にこれまで筆者が収集してきた竹島関連資料を基に、この写真を検討した結果、1941 年に大阪毎日新聞の写真部員が撮影したことが明

図 1　韓国人の海女が写るアシカ猟師の集合写真。

Ⓐ：三又の一部、Ⓑ：アシカの檻、Ⓒ：木箱、Ⓓ：カンコの船尾、Ⓔ：樽、Ⓕ：網籠。①～⑧：アシカ猟に携わった人々で、①は都田佐市氏、③は中渡瀬仁助氏、④は橋岡忠重氏、⑦は茂松富次郎氏、⑧は吉山武氏。⑨～⑪：毎日新聞の記者で、⑩は吉岡大蔵氏。⑫：海女を連れてきた韓国の船頭、⑬～⑯：済州島の海女。（1941 年撮影、個人蔵の複写・画像処理写真）





らかになった[1]。その後さらに、検討を進めた結果、これまで詳細が不明であった竹島関連の写真も同年の取材の際に撮影されたものであることが判明した。本稿ではそれらの同定根拠を詳述するとともに、この「集合写真」に関するアシカ猟師の証言についても検討したので報告する。

## 1　「集合写真」をめぐる年代

これまで発表されている文献・資料は、以下に示すようにその撮影年代や提供元がさまざまである。

【1929 年】

1977 年 5 月 9 日の読売新聞では、1929 年に撮影されたもので、アシカ猟にかかわっていた橋岡忠重さん提供となっている。

【1932 年】

『独島アシカ絶滅史―隠岐見聞録』では 1932 年の写真となっているが、提供元や撮影年代の根拠は示されていない[2]。

【1934 年】

隠岐の島町（旧:五箇村（こかむら））久見の橋岡家に保存されていたアルバム（以下、『橋岡アルバム』と呼ぶ）には、「集合写真」を複写した写真が貼られており、昭和 9 年 6 月との書き込みがあった[3]。また、同家には『橋岡忠重所蔵資料写　竹島漁業資料』という複写ファイルと一部の実物があり、その中に東京朝日新聞に貸し出し･返却された「集合写真」があった[4]。これには年代は書き込まれていないが、そのコピーには橋岡忠重氏が指し示されていた。

現在は展示されていないが、かつて五箇村（現：隠岐の島町）の郷土館には「集合写真」が展示されており、「東島の浜にて（昭和 9 年 6 月撮影）」と説明されていた。

『目で見る隠岐の 100 年』では 1934 年の写真となっている[5]。写真の提

1　井上貴央「竹島アシカ猟　写真の真実（上）」山陰中央新報 2021 年 7 月 2 日。
2　朱剛玄（チュ・ガンヒョン）『独島アシカ絶滅史－隠岐見聞録：種の絶滅に関する反文明的記録』（2016 年）244-245 頁。
3　現在その所在は確認できないが、筆者の手元にはそのコピーがある。
4　1992 年 7 月の筆者の調査時には、実物とそれを複写してまとめたファイルがあった。
5　松浦康麿（監修）『目で見る隠岐の 100 年』（1999 年）68 頁。

供元は明記されていないが、提供元リストから判断すると郷土館の提供と思われる。『写真アルバム 隠岐の昭和』では、1934 年の写真で竹島資料室の提供となっている[6]。また、2016 年 6 月に開館した隠岐の島町の久見竹島歴史館の展示では、昭和 9 年撮影となっているが、提供元は未記載である[7]。

これらの書籍や展示で撮影年代を 1934 年 6 月としている根拠は、『橋岡アルバム』の書き込み年代によると思われる。橋岡家にあった「集合写真」の複製が郷土館で展示されるに至り、そこから写真やデータが提供されていったのであろう。

【1935 年】

『日本海に浮かぶ』では写真は昭和 10 年代のもので、高梨フジ子氏提供となっている[8]。このフジ子氏は読売新聞の高梨裕平記者の縁者で、取材過程で記者が入手した写真の複製を所有していたものと考えられる。

教育副教材『ふるさと隠岐』[9]や『竹島学習リーフレット竹島～日本の領土であることを学ぶ』[10]では年代は 1935 年となっており、いずれも「収支決算書参照」とある。この収支決算書は、昭和 26 年 10 月 11 日に橋岡忠重氏が島根県水産部にあてた報告書の中に収載されているものである[11]。そこには昭和 8 年から昭和 10 年までの収支の概略が示されているが、昭和 10 年春（5 月 20 日～7 月 10 日）のみに海女 4 名に 600 円を支出したことが記されている。これが海女 4 人が写る「集合写真」が、1935 年のものと判断された根拠になったのではないかと思われる。

## 2　「集合写真」の風景と人物

「集合写真」は東島の石原で撮影されたもので、背景には五徳島が写っており、人物はやや高い位置から撮影されている。写真の構図や細部の

6　日野稚之（監修）『写真アルバム 隠岐の昭和』（2015 年）21 頁。
7　写真を拡大すると網点が見えることから、実物からではなく印刷物からの複写であると思われる。
8　西郷町合併三十周年記念写真集編集委員会（編）『日本海に浮かぶ』（1989 年）129 頁。
9　隠岐の島町ふるさと教育副教材編集委員会『ふるさと隠岐』（2007 年）98 頁。
10　島根県ら「竹島学習リーフレット竹島～日本の領土であることを学ぶ」（2017 年改訂版）。2022 年改訂版では写真の年代は 1941 年に修正されている。
11　『橋岡忠重所蔵資料写　竹島漁業資料』にあり、正確には「収支決算書」ではなく、「収支計算書」である。





鮮明さから判断すると、ある程度の写真撮影技術を備えた人物がそれなりの性能を有する写真機で撮影したものと考えられる。

左にはアシカを吊り上げる三又の丸太が 1 本写っている（図 1-Ⓐ）。海岸にはアシカの檻が写っており（図 1-Ⓑ）、檻の上には丸石が載っている。檻と人物の間には木箱が一つ見られるが（図 1-Ⓒ）、側板の構造がアシカの檻とは異なっており、これがアシカの檻なのかどうかは断定できない。左側には浜に引き上げられたカンコの船尾の一部が写っており（図 1-Ⓓ）、さらにその前方には 2 個の樽（図 1-Ⓔ）と網籠（図 1-Ⓕ）が写っている。

写真に写る人物は全部で 16 人で、それぞれに①～⑯の番号を付した。右側の⑬～⑯の女性は韓服を着ており、韓国の海女とされている[12]。また、その横の帽子をかぶり白いジャケットと黒いズボンを履いた人物⑫は、海女を連れてきた韓国の船頭とされている[13]。

後列の⑨～⑪の 3 名は若い男性 3 名で、その姿・服装からは猟師には見えない。⑩の人物は黒縁丸眼鏡をかけて縁のあるカーボーイハットのような帽子をかぶっている。

このようにして人物を見ていくと、人物①～⑧の大部分はアシカ猟師のようないでたちに見える。名前が判明している人物は、①が西郷町（現：隠岐の島町）港町の都田佐市氏[14]、④が橋岡忠重氏[15]、⑦が西郷町港町の茂松富次郎氏である[16]。また、⑧は西郷町蛸木の吉山武氏であるとの本人証言がある（後述）。③の鉢巻きをして丹前を羽織っている人物はこれまで論じられたことはないが、その顔貌から判断してアシカ猟頭領であった西郷町の中渡瀬仁助氏である。

北海道大学グローバル COE プログラム「境界研究の拠点形成」の企画・監修による DVD『知られざる国境の島　隠岐』において、前田芳樹氏が「集合写真」の人物を解説している。その中で、自分のおじい

12　前掲書（註 5）68 頁、前掲書（註 9）98 頁、前掲リーフレット（註 10）および久見竹島歴史館の展示解説。
13　久見竹島歴史館の展示解説。
14　前掲書（註 8）129 頁。
15　前掲書（註 8）129 頁。および、久見竹島歴史館の展示解説。
16　前掲書（註 8）129 頁。本文にある「茂松富三郎」は「茂松富次郎」の誤り。および、久見竹島歴史館の展示解説。